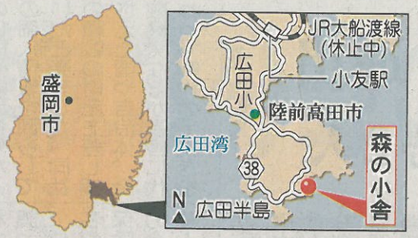
いわて 東日本大震災

ともに前へ ⑤1

陸前高田市の赤川勇治さん

地域支えカフェ経営

「奥州♡絆の会」の渡辺明美代表（右）らと談笑する赤川勇治さん（中）＝陸前高田市広田町



広田半島の南端部、陸前高田市広田町赤坂角地の未舗装の林道をくぐると浜の町とは異空間、木々に囲まれたガーデンカフェ「森の小舎」が現れる。主宰の赤川勇治さん(64)は店の経営と並行し、奥州市のボランティア団体「奥州♡絆の会」の現地駐在員として広田地区の「ニーズ」を探り地域の再生を支える。

8月上旬、同会の渡辺明美代表(65)＝奥州市胆沢区小山＝ら5人は、陸前高田市広田町の広田小仮設住宅で企画するイベントの打ち合わせのため赤川さんのカフェを訪ねた。

同会は与えるだけの支援ではなく、被災者と一緒に何ができるかに知恵を絞る。5月は仮設住宅の住民に会場設営や調理を手伝ってもらい、バーベキュー祭りを開催。9月も仮設団地でイベントを企画中だ。

■支援に奔走

赤川さんは横浜市出身。田舎暮らしに憧れ27歳で妻、娘2人と奥州市水沢区に移住した。定年で写真機材の小売業に区切りをつけ、25年前に建築した陸前高田市の別宅をカフェに改造し2010年3月オープン。冬場は水沢区の家族の元に帰る「単身赴任」生活を第3の田舎で送っていた。

カフェ経営2年目に入り、いよいよという時大地震が襲った。周辺の根岸地区はほとんど浸水被害はなかったが、半島の付け根に両側から津波が押し寄せ広田半島は孤立した。

数日間、近所の知人宅に身を寄せ食事を分けてもらったが、食料調達ができなくなった。近所も同じ状況と推測し、家族のいる水沢区まで往復して物資を1日置きに運搬。軽自動車いっぱいに積んだ食料を知人宅に「近所に配って」と託し、次の調達に奔走。体が勝手に動いた。

物資運搬を続けていた震災の約10日後。知人のつてで赤川さんを知った渡辺代表から「どこに何を支援したらいいか」と突然連絡が入った。それなら広田を実際に見てほしい―。渡辺代表らを案内した。

「私たちの活動は赤川さんと始まった」と渡辺代表。自宅避難者が多く、支援が行き届かない一部の広田町の住民を11年4月、奥州市胆沢区の温泉施設に招待した。以来、同町に重点を置き支援を継続する。

■視線変わる

一人でできる活動は限られていた。同会と合流した赤川さんは「地域の人が喜んでくれた顔が忘れられない」とぽつり。「突然よそから来て、山奥でカフェを開いた変わり者」という周囲の視線が変わり、受け入れられた気もした。

同年6月には広田保育所など5カ所を巡り、水沢区の家から持参した水でコーヒーを振る舞った。その場で入れた香りは震災後で混乱する中、保育士や子育てにいそしむ保護者たちを癒やした。

休む場がないとあちこちで聞き、断水が解消した同年7月から店を再開。陸前高田市内や大船渡市の女性、県外ボランティアに人気で、自分で作ったかわいらしい木工雑貨の数々は時間の経過を忘れさせる。

常連客でもある渡辺会長らと談笑し「こんな活動に関わるなんて、前の自分じゃ考えられない」とわざと乱暴に言い放った。自分を変えた震災。直接活動に関わる機会は少なくなってきたが、カフェで癒やしを提供する本業とともに、市外からの来店者に震災を伝え、忘れない思いも発信し続ける。

（奥州支局・中村有希）

Q 「森の小舎」1101世帯のうち震災の津波で348世帯が全半壊。津波で主要道が寸断された広田町は一時孤立した。地区幹線の県道38号でかさ上げ整備が計画されている。カフェ「森の小舎」は同町赤坂角地159の2。毎日午前10時から日没まで営業。電話0192・56・3054。

応援メッセージ

一息つく時間くれた

陸前高田市竹駒町 市子育て相談員 佐々木美津子さん(52)

震災直後、断水の中でコーヒーを入れてもらった時の豆のいい香りが忘れられない。余震も続き、こわごわと毎日を過ごしていた保護者や保育士に、ほっと一息つく時間を提供してくれたことに感謝したい。当時は奥州市と陸前高田市を行き来し、近所の人に物資配りをするなど支援に奔走して頭が下がった。赤川さんのカフェは本当にすてきで、訪ねるときは必ず知人を連れていき紹介している。これからもたくさんの人の支えとなる場所として活力を与えてほしい。